２０２５・７・２７　　黄金井尚美　主任牧師

＜キリストの最期に関わった３人＞

マルコ１５：１～２１

夜が明けて、ローマ総督ピラトの元で裁判をする為、イエスさまを連行し訴える。

「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」　ルカ２３：２

１、ポンテオ・ピラト

総督とは、属州（ローマの支配下にある領土）を統治する最高責任者。

◆総督ピラトは、訴えが妬みからであるとすぐにわかったが、自己保身から判決を下すことをためらい、群衆の判断に任せた。

だが、ピラトは彼らに、「あの人がどんな悪い事をしたというのか」と言った。しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ」と叫んだ。15 それで、ピラトは群集のきげんをとろうと思い、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打って後、十字架につけるようにと引き渡した。　【１４，１５節】

2、バラバ

イエスさまの死刑判決と引き替えに、恩赦で釈放された死刑囚。
その後の人生をどのように生きたのだろうか・・・。

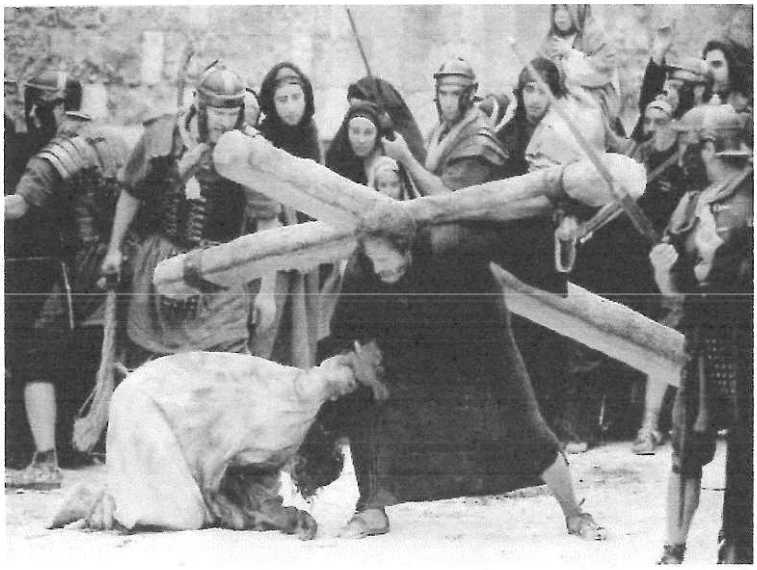
＊ラーゲルクヴィスト著　　小説「バラバ」
「なぜ自分が救われたのか」という問いがバラバの内に残っていた？！

◆バラバが自分の身代わりになられたキリストに感謝するとは限らない。回心するとも限らない。けれど、感謝し回心する人のためだけに、キリストは十字架に架かったのではなかった。ご自分を踏みつけるような人、すべての人のために十字架に架かられた。

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。
それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。
Ⅰペテロ３：１８

3、クレネ人シモン　　**＊クレネ･･･北アフリカのリビヤ地方にある町**

アレキサンデルとルポスの父。
過ぎ越しの祭りでエルサレムに来たが、突然引きずり込まれ無理やり十字架を担ぐはめになった。イエスさまの後ろ姿を見ながら、ゴルゴダの丘までの道を共にした。



「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」
マルコ８：３４

◆自分の十字架を負うことなしに、イエスさまが負われた十字架の苦しみを理解することは難しい。

◆イエスさまが担った苦しみ、痛みを自分ごととして知ったなら、そしてそれが自分のためであったとわかったなら、自分がどれほど愛されていたかを知る。